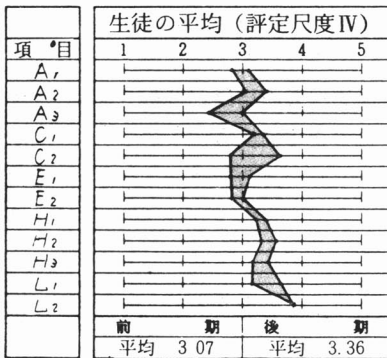
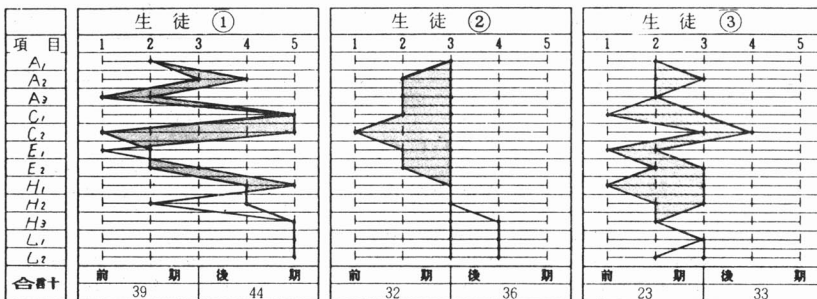


(生きる喜びと充実感 3.3 → 3.7) について評価が大きく向上しているのが特徴的であり、これは教師による評価ともよく一致した。更に項目 I (自己の内省) 項目 J (責任感) および項目 K (自他の向上) では、自己の内省力を深めながらも生き生きと学習活動を行う生徒の姿がうきぼりにされている。評定尺度Ⅳによる調査では、補完が必要と思われた項目 A, C, E, H, L の全部にわたってすべての自己評価が向上した。特に項目 C₂ (観察・実験への取り組み) の評価が著しく増し更に項目 A₃ (問題解決への意欲) の大幅な増加と合わせ、明らかに生徒の主体性 (自己教育力) は伸長されたと考えられる。



2. 個人の変容

評定尺度Ⅱおよび評定尺度Ⅳでみられた評価1の項目数は事後調査において激減したので、次に評定尺度Ⅳで低い評価をつけた成績上位の生徒 (番号①), 中位の生徒 (番号②), 下位の生徒 (番号③) についてその変容をみてみた。



生徒①はかなり上位の生徒である。評価は全体に好転しているにも拘らず数項目において評価が低いのは自己に厳しい眼を持つためであると考えられる。教師からの評価は高い。生徒②は典型的

な中位の生徒で、研究実践授業を通してかなり問題意識が高まり、主体的な活動が目立つようになってきた。生徒③は評価1の項目を多く持つ下位の生徒であったが少しずつ主体性を増し、探究的活動ができるようになってきた。

〔4〕研究の成果と今後の課題

1. 教材の分析を通して、教材の精選や個人差に応じた教材の導入に見通しを得ることができた。
2. 事象の提示から得た疑問点や発想を取り上げたことによって生徒の問題意識が高まり、発展的な学習ができるようになった。
3. 課題設定への取り組みを自己評価させたことで生徒の学習内容に対する興味・関心や課題の把握状況が判り、指導法の改善に役立った。
4. 生徒の発想をふくめた創意工夫による教材・教具の開発を指導過程に位置づけたことは、学習内容に対して興味・関心を高め、意欲的な態度の形成につながった。
5. 自己診断表の活用により学習課題を明確にとらえ、その解決のために意欲的に取り組む生徒が増し、学習内容の到達度も高くなった。

以上のことから「問題意識をもって物事を見て主体的に目標を設定する」といった学習意志の形成や学習の仕方の習得についてある程度目的が達成されたと考えられる。しかし、学習課題の提示の仕方や把握のさせ方および課題設定時の生徒の意識を見る評価法等について更に研究が必要である。また、生徒が自分の学習の進歩の跡を見るこ

とができ、そして次の学習に対する意欲が生まれるような自己評価の方法を更に工夫したいと考えている。

(担当 上遠野洋明)